筑波学院大学紀要第３集　159～168ページ　　2008年

＜研究ノート＞

銚子石の石塔文化
― 霞ヶ浦北岸地域の様相 ―

千葉　隆司*

Stone Pagoda Culture of Chosi Stone

Takashi CHIBA *

戦国時代から江戸時代初期にかけての短期間に、霞ヶ浦北岸地域では珍しい砂岩製石塔が造立された。その石材は、千葉県銚子市愛宕山周辺から産出する砂岩で、通称「銚子石」とよばれている。霞ヶ浦北岸地域では、客体的な石材であると共に、特徴的な石塔に採用される傾向にあり、中にはその流通の背後に宗教者や関西系人物の影響が想定できるものもある。本稿では、そうした銚子石の流通を人々の動きを通して考えてみた。

キーワード：銚子石、霞ヶ浦北岸地域、ミヤボトケ、一石五輪塔、宗教者、関西系漁師

1　はじめに

筑波山系の山並みの西側に位置する霞ヶ浦北岸地域（石岡市やかすみがうら市など）は、一級河川恋瀬川を始めとした中小河川を使用することによって、筑波山系から産出する石材（大きく分けて変成岩と花崗岩）を運び込め、大いに利用できる地域であった。古くは、変成岩を利用した古墳の石室や石棺を上げることができ、霞ヶ浦の水運によって「香取の海」一帯に流通した。その後、変成岩は、板状に剥離する性質から中世において常陸型板碑の石材として確立し、現代に至るまで石碑用石材の代表的な存在となっている。一方で花崗岩は、古代寺院の礎石や露盤などに利用が始まるが、堅牢な性質から造形的に利用されるのには技術発展を待たねばならなかった。鎌倉期に入り、真言律宗を東国において普及するために常陸入りした良観房忍性は、花崗岩を得意とし宋国に技術系譜を引く石工大蔵派を引き連れて来たため、当地方の石材産業に変化をもたらした。その結果、拠点とした三村山清冷院極楽寺周辺に作例を残すと共に、大蔵派に習った石工を当地に根付かせたのである。これを契機に常陸南部を中心に、地元石材の花崗岩を使用した石造物が造立されるようになり、室町時代には五輪塔を始めとした供養塔が盛んに生産されるようになった。

こういった石材には事欠かない霞ヶ浦北岸

＊　かすみがうら市郷土資料館、Hometown Museum of Kasumigaura City

地域に、他地方の石材が戦国時代に入るとみられるようになる。その数量は、変成岩や花崗岩を補完するようなものではない。このような他地方の石材を代表するものが下総国銚子地方で産出する砂岩、通称「銚子石」である。本稿では、霞ヶ浦北岸地域の銚子石で造られた戦国末期から江戸初期の石造物を取り上げ、若干の考察をしてみることとする。

2　銚子石について

千葉県銚子市や飯岡町の付近には凝灰岩質砂岩がみられ、通称「銚子石」と呼ばれている。色調は、黄褐色であり比較的均一な粒子によって構成される岩石である。この石材は、横穴式石室に使用されるなど、古くからの使用が認められる石材であり、軟質であるため加工し易いが、風雨にさらされる屋外のものとしては耐久性がない。古墳時代以降は、中世の時期に供養塔（五輪塔・一石五輪塔・宝篋印塔・ミヤボトケなど）などに使用され、現代に至るまで石塔文化に多大に貢献する石材となっている。

銚子石は、中世における関東地域の石材流通をまとめた秋池武氏によると、西は千葉県香取市、南は千葉県山武町、北は霞ヶ浦沿岸と限定された地域に流通していたという。使用される時代も南北朝時代から流通量を増し、室町・戦国時代に広く流通する傾向があることを指摘している（秋池2005）。霞ヶ浦北岸の様相は、飛田英世氏によって行方市の15～16世紀代の供養塔を中心に紹介されている（飛田1997･2003）。中でも行方市に所在する西蓮寺の最仙供養塔と伝えられる宝篋印塔は、塔身四面に刻まれる梵字（金剛界四仏）が塔身一杯に薬研彫りで施されることから古相を示すと飛田氏は指摘しており、当地方では最も古い15世紀段階に比定している。その他にも、西蓮寺には天文９年（1540）銘の五輪塔や元亀３年（1572）銘の宝篋印塔がみられ、いずれも権大僧都と記されることから西蓮寺に関わる僧侶の供養塔と考えられている。これら銚子石の石塔は、佐倉市の元亨４年（1324）銘の下総型板碑に始まり、五輪塔や宝篋印塔、ミヤボトケ、一石五輪塔へと戦国時代の16世紀に使用最盛期を向かえることが判明している。

3　霞ヶ浦北岸地域の銚子石

今回紹介する銚子石を使用した供養塔は、霞ヶ浦北岸に位置するかすみがうら市域を中心とした類例で、銚子石の流通の一様相として紹介してみたい。そして、この流通の背景には、宗教者の介在や戦国時代から江戸時代に移り変わる動乱期にみられた特徴的な事象であったことも想定してみたい。

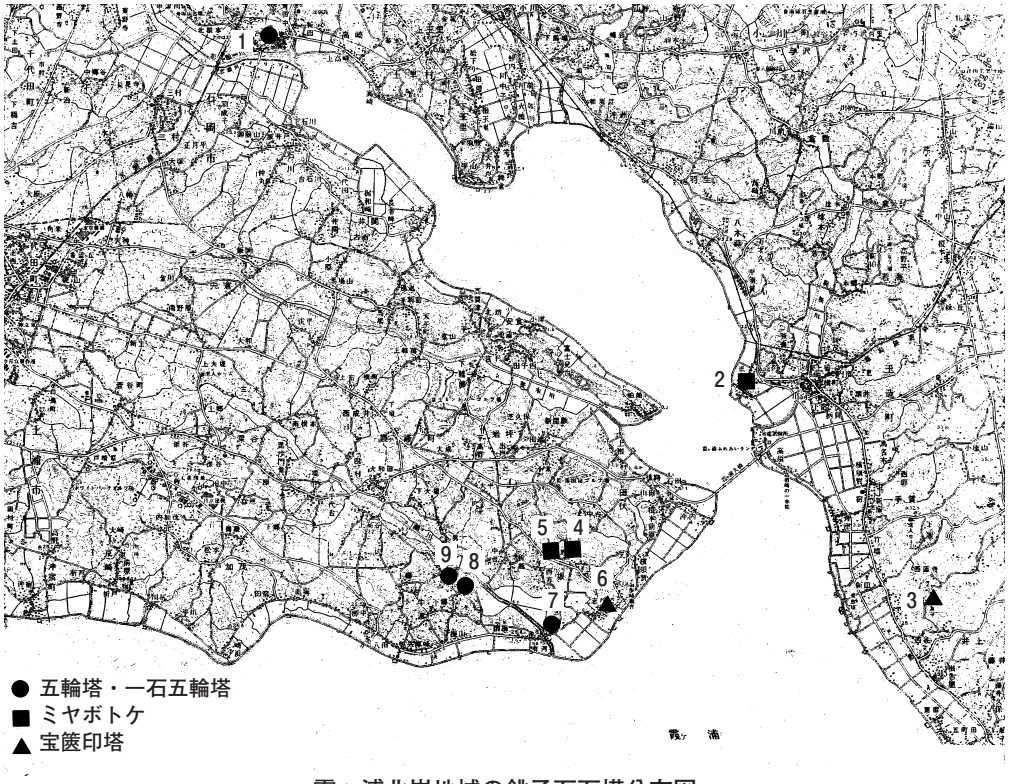
かすみがうら市には、４種９基の銚子石を使用した石造物が確認できる。これらはすべて、旧霞ヶ浦町地区に所在し、中でも霞ヶ浦に比較的近い地区に認められる。４種ある石造物は、ミヤボトケ・宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔である。

3．1　ミヤボトケ

出島半島突端地区である坂地区にのみ存在し、２基ある。１基は坂本家墓地内に所在し、もう１基は神宮寺（廃寺）の境内墓地内に所在している。坂本家墓地内のものは、個人宅に付属して建立された地蔵堂に隣接して安置されたミヤボトケであり、中世五輪塔や近世墓塔と共にある。一方の神宮寺は、近くの鹿島神社の別当と伝えられ、最近改築された小堂には11世紀末～12世紀にかけて制作されたと考えられる銅造千手観音菩薩立像や13世紀代の制作と思われる銅製阿弥陀如来懸仏、そして木炭化した約１ｍを計る一木造の仏像などを安置する寺院である。境内には、筑波山花崗岩で制作された五輪塔・宝篋印塔などの中世供養塔と共に延宝４年（1676）か

ら弘化５年（1848）の銘がみられる墓塔などが所在し、古代からの断続的な資料が見受けられ、比較的古くに創建されていた可能性がある。神宮寺のミヤボトケは、総高53.4cm（身舎高26.2cm＋屋根高27.2cm）、身舎幅28.6cm、屋根幅40.8cm、身舎奥行き26.0cm、屋根奥行き39.2cm、正面開口部幅8.2cm、開口部高さ11.4cmを計る。正面には、春日鳥居様式の鳥居が陽刻され、鳥居の貫下は開口し、身舎内部の空洞部に通じている。空洞部には何もみられないが、位牌などの有機質のものが納入されていた可能性も考えられる。また鳥居の貫と島木の間には神額が設けられている。この神額に文字が刻まれていた可能性もあるが、全体的に磨耗しているため現在は確認できない。このミヤボトケの据え置かれている場所が、当時のままであるとすると神宮寺南側を通る街道を正面にした南向きで、神宮寺が東側向きであるのに対し、直行した向きとなっている。

この２基のミヤボトケは、いずれも単層の入母屋造りで、銘文などは認められない。出島半島の対岸である稲敷郡美浦村では、牛込地区の水飼家墓地や大塚地区の堀越家所有の山林（山王山）にあり、堀越家のものは総高1.65mの３層形のミヤボトケである。一説には江戸崎城主であった土岐頼英婦人の供養塔との伝承もあり、それに相応しい様相を保っている。このような層塔形式のミヤボトケは、行方市浜の瑠璃光山薬王院東福寺に７基



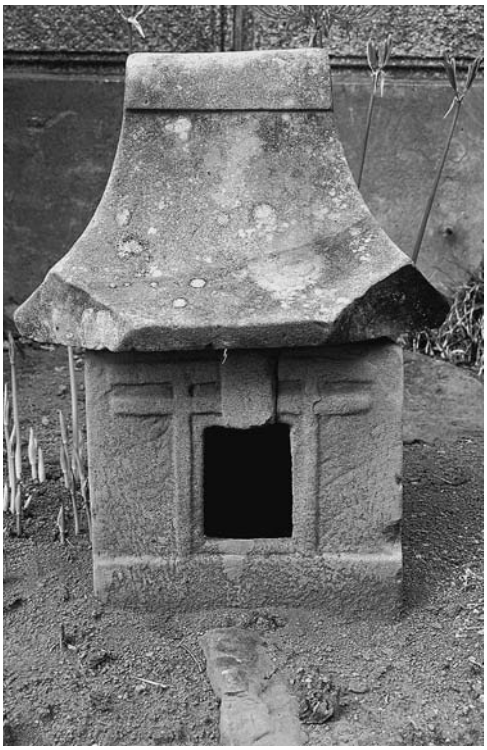
霞ヶ浦北岸地域の銚子石石塔分布図

1　殿塚家墓地（石岡市高浜）　2　東福寺（行方市浜）　3　西蓮寺（行方市西蓮寺）
4　坂本家墓地（かすみがうら市坂）　5　神宮寺（かすみがうら市坂）
6　慈眼寺（かすみがうら市志戸崎）　7　薬師堂（かすみがうら市坂）
8　宮嶋家墓地（かすみがうら市牛渡）　9　大久保家墓地（かすみがうら市牛渡）

（他に単層のもの２基）安置されている。東福寺本堂東側には、ミヤボトケで構成される墓地一角があり、そこには塔身に年号が刻まれているものが２基存在している。「道□禅定門　寛永十一年」、「正保二年」とある２基は、いずれも層塔形の初段塔身、鳥居の脇に刻まれる銘文で、寛永11年（1634）のものは左側に年号、正保２年（1645）のものは右側に年号を記す違いがある。東福寺のミヤボトケ群は、近世初期に短期間で造立されたものと考えられる。東福寺は、観応２年（1351）に比叡山宝幢院主の東範が、本尊の薬師如来を奉持し、現在の地に薬王院と称した草庵を営んだことに始まるとされる。この薬王院がどの程度の寺勢を持ったか不明であるが、寛文３年（1663）に水戸領内の寺院調査によって作成された「開基帳」には、薬王院の記載がなく、寺伝にも元禄５年（1692）に典信が中興開基となって東福寺と号したとあることから、中世後期の段階で荒廃し江戸中期に中興されたことが想定される。とすると、寛永・正保の年号をもつミヤボトケは、荒廃した時期に造立されたものとなる。荒廃した寺院で供養された墓塔は、聖のような死者を供養する宗教者の関与が窺えるのである。

ミヤボトケは、水野類氏によると銚子石で制作された堂塔型の墓石とされる（水野2003）。その分布は銚子石分布圏と重なり、銚子石を石材として活躍する石工によって制作されたものである。さらに水野氏は、このような堂塔型のラントウを総合的に考察し、ミヤボトケなどのラントウと弥勒信仰を結びつける考えを示しており、高野山信仰を背景に全国的に広がった可能性を指摘している。

筆者は、以前戦国末期の高野山信仰の一例を考察したことがあるが（千葉2005）、盛んに高野山信仰が実施された地域とミヤボトケの分布地域は必ずしも一致していない。確かに四十九院・扁額を掲げた鳥居が表現されるミヤボトケは、弥勒菩薩の兜率浄土信仰が背景にあったことが分かり、中世末に弥勒信仰を普及していた高野山信仰に結びつく可能性は否定できない。では、何が常陸と下総の高野山信仰の形態に差があったのであろうか。常陸国は、清浄心院を宿坊としていたのに対し、下総国では蓮華三昧院と違っていた。高野山では、蓮華谷に属する聖が最も盛行したので、蓮華谷別所の創始者である明遍上人が高野聖全体の開祖と伝えられていた。この明遍が、佐々木高綱了智房から譲り受けた庵が後の蓮華三昧院である。明遍が蓮華谷に入り、諸法空を観じた時、一面に蓮華が生じたとされる伝説の池があり、この伝説を描いたとされる「信好成就の弥陀」という阿弥陀三尊の仏画が蓮華三昧院に伝わっていた。明遍が専修念仏に帰していたことや先の伝説などから蓮華三昧院に属する高野聖は回国と高野山への納骨を行う特色を持ち始めていた。



神宮寺のミヤボトケ

水野氏は、ミヤボトケの四十九院の模様が入っているものなどから弥勒信仰との関連を指摘しているが、筆者はつい最近まで使用された棺台との関係も考えてみたい。棺台は、社形の建物の四面に鳥居を配置し、地域によっては鳥居の周囲に卒塔婆風の柵を四十九本立ち並べている。これは、神社祭礼に使用される神輿と類似する形状を示している。この種の棺台は、幕末から明治にかけての廃仏毀釈が社会情勢を示すようになる時代に記された『葬儀式』にみられる祭屋を棺に表現したものと考えられる。仏教での葬儀を見直し、神道葬の方法で執り行うことが優越され、一般化していった棺台と思われる。ミヤボトケが、隆盛した中世末から近世初頭期も宗教史的には混乱した時期であり、江戸期の寺請制度に向けた宗教者にとっては変革の時期であった。高野山においても元和元年に出される「高野山衆徒法度」に向けて様々な議論が飛び交ったものと思われる。そういった中で、地方において回国する高野聖は、不安定な立場でありながらも回国聖としての職責を全うしていたのであった。この銚子石を使用したミヤボトケは、そのような回国聖による思想のもとで制作された石塔と考えられるのである。

3．2　宝篋印塔

銚子石で制作された宝篋印塔は、志戸崎地区の慈眼寺境内墓地内にのみ所在し、笠部と基礎部が遺存している。慈眼寺は、青竜山慈眼寺といい、かすみがうら市下軽部の長福寺の末寺になる寺院で、現在は無住となっている。近年、寺院内に安置されていた仏像が、本尊以外盗難に遭ってしまっている。本尊は、像高70.5cmを計る南北朝時代後半から末頃に制作された十一面観音菩薩で、明和9年（1772）に彩色を中心に修復されている。

慈眼寺の宝篋印塔は、笠部高26cm、幅34.5cm、奥行き37cm、基部高28cm、幅30cm、奥行き31cmを計る。笠部の上下には２箇所ほぞ穴が設けられており、層輪部との設置面に径10cm、深さ約５cmのほぞ穴、同じく笠部の塔身部設置面に新たなほぞ穴が笠部にあり、径10cm以上の円形掘り込みを有している。両部材共に銘文はなく、加工痕である鑿痕が表面にみられる。

銚子石で制作された宝篋印塔は、銚子市馬場町の円福寺（飯沼観音）に16世紀後半の天文年間から17世紀前半の寛永年間にかけてのものが所在する。これらは下総型宝篋印塔と呼ばれ、霞ヶ浦沿岸では行方市西蓮寺の元亀３年（1572）や石岡市清涼寺の寛文５年（1665）などがみられるが、慈眼寺のものは笠部の外反する隅飾りの開き度合いが大きく、全体的に寸胴化しないため西蓮寺例に近く、16世紀後半と捉えられる。慈眼寺と類似するものは行方市玉造にある玉造城跡に残る

慈眼寺の宝篋印塔

宝篋印塔、同市於下の鷲生山曹源寺にある下河辺義親一族の供養塔と伝承がある宝篋印塔が上げられる。

筆者が以前調査に関わった石岡市では、宝篋印塔（墓）は、一般に中世（室町後期から江戸初期のものがほとんど）は花崗岩製のものが多く、近世に至っては安山岩・砂岩（銚子石）が僅かにみられる程度であった。この傾向は、かすみがうら市域でも同様で、特徴的に砂岩がみられる状況である。造立した目的は、中世に関しては供養塔や墓塔と考えられるものがほとんどであるのに対し、近世に関しては境内の一角にシンボルタワー的に造立する信仰塔としてのものが多い。そういった中で寛永６年（1629）に造立された稲敷市沼田（旧江戸崎町）の大日山の砂岩製（銚子石）宝篋印塔は、「奉造立沼田郷　時念仏六十人　ア（梵字）　寛永六巳巳年八月十日」と記されており、念仏衆によって立てられている。時念仏は、中上敬一氏によると「その目的は自己の現当二世安楽を願ったもので、そのために食事を一日一回にして己が身を苦しめ、精進勤行をした逆修供養のこと」とし、湯殿山信仰に源流があるものとしている。これに従うと稲敷市沼田の宝篋印塔の場合は、沼田地区の念仏講中の60人が人々が、前記の目的で逆修供養したと考えられる。石塔が立てられた場所が「大日山」ということからも、そのような行為は首肯できるものと考える。

３．３　五輪塔

五輪塔は、宮嶋家墓地内に空風輪のみがある。高さ37cm（風輪高さ18cm）で径21cm（隅丸方形）と高さ33cm（風輪高さ14cm）で径21cm（円形）の２種が存在する。後者の方が、古相を示しており、時期的には他にみられる花崗岩製五輪塔と共に17世紀前半期のものと思われる。宮嶋家にみられる五輪塔の多数が花崗岩製五輪塔であり、銚子石はあくまでも客体的な特性をもつ五輪塔といえる。

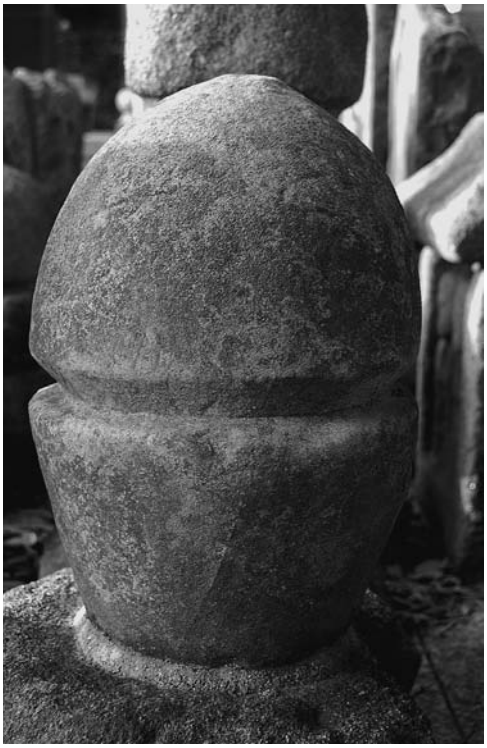
宮嶋家は、「エンジュイン（円寿院か？）」などの名称や屋敷周辺に地下式坑特有の陥没がみられたり、屋敷墓地内に無縫塔が存在するなど、ここに宗教施設があった可能性が高いことを示している。現在も屋敷入り口付近に不動堂（内部に南無聖徳太子像・虚空蔵菩薩坐像･不動明王などが安置される）があり、古くから宗教を重視する支配者的家系と想定される。

近隣では、石岡市常光院に寛文４年（1664）の銘文が入った五輪塔があり長胴化した風輪は、宮嶋家にみる新相のものに類似している。これら銚子砂岩を使用したものは、17世紀を前後する時期に限られ、宝篋印塔と同様に中世的な花崗岩、近世的な安山岩へと移り変わる過渡期の一石材として使用されたものと考えられる。石岡市の石造物調査では、空風輪を数えると中世のものが401基、近世のものが517基数えられた。この数量は、他の供養塔や墓塔の数の群を抜き、当地方において、一般的なものと捉えることができる。中世後半段階に現れる銚子石の五輪塔は、あくまでも客体的であり、その採用される割合から一時の思想や流通網で採用された石塔と考えられるのである。

３．４　一石五輪塔

一石五輪塔は、出島地域で５基確認できる。すべて湖岸に程近い坂・牛渡地区に所在し、薬師堂境内２基、宮嶋家墓地２基、大久保家墓地１基となっている。

薬師堂のもの２基は、ほぼ同規格で制作されたものと考えられ、高さ50.5cm、幅17cm奥行き16.5cmを計る。幅17cmに切り出された直方体の石材に五輪塔の形態を削りだしていったもので、全体的に寸胴な姿となっている。これは、一石五輪塔の特徴であり、火輪・水輪・地輪共に同一幅で制作されるものとなる。空部は、宝珠型を意識して制作されているので古相を示しているが軒の反り具合



宮嶋家墓地の五輪塔

は、軒幅の中心5.5cmに対し軒幅の角7cmと　軒幅の中心6.3cmに対し軒幅の角7.5cmの僅かな違いが認められるが、その軒反りの比率や形態は17世紀初頭の五輪塔に類似している。水輪は、算盤型を示している。

宮嶋家墓地の2基は、高さ51cm、幅17cm、奥行き16cmと高さ44.5cm、幅13.5cm、奥行き13cmの大小2種存在する。小型の方が空風輪の境表現を線とするため、大きい一石五輪塔が古相を示している。軒のそり具合は、大きい方が軒幅の中心4.5cmに対し軒幅の角が7cm、小さい方が軒幅の中心5cmに対し軒幅の角が5.5cmと反りが弱く表現されている。

大久保家墓地の1基は、宮嶋家と程近い場所にあり、他の石造物と共に並列している。地輪が土中に埋没しており、現況で総高44cm、幅16cm、奥行き16cmを計る。軒の反り具合は、中心が6cmに対し、角7.5cmとなり、薬師堂のものとほぼ同規模と考えられる。空風輪の境界表現は、線で示されており、宮嶋家墓地の一方と類似する。

以上の5基の一石五輪塔の形態からみえてくるものは、一般的な五輪塔の形態変化と同様な様子が窺え、空風輪の境表現が明確な彫りこみから線になる様子、火輪の軒幅が厚みを増すことが分かる。量産化に伴う形骸化が進行したのであろう。

一石五輪塔は、霞ヶ浦沿岸では鹿島市教育委員会保管や石岡市高浜の殿塚家墓地、行方市藤井久保共同墓地にみられ、飛田氏は墓前への供物か、仏堂などへの奉納物と考えている（飛田1998）。実際に銚子市では小型五輪塔がミヤボトケに納入された状況で確認されていることを水野氏は指摘しており（石造物研究会2007）、単独の使用はあまり考察され

ていない。しかし、今回紹介するものは、すべて単独で使用されたものであり、いずれも他の石造物と組み合わさるような祀られ方や周辺にそういった石造物の存在がないものである。

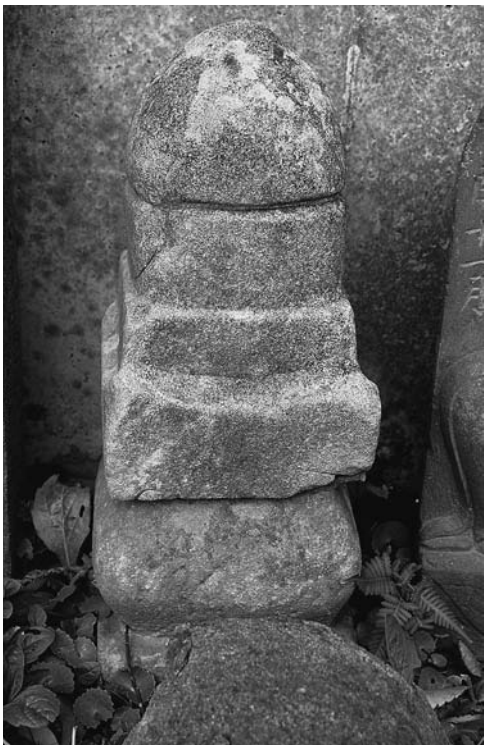
この一石五輪塔の終焉と分布北限を示すものが石岡市高浜の塚殿家墓地例である。殿塚家墓地例は、空風輪が欠損しており、現況で高さ50cm、幅・奥行き共に18.5cmを計る。地輪に「ア（梵字）　寛文９天　道陽禅定門　霊位　巳　正月九日」とあり、寛文９年（1669）に立てられたことが分かる。この一石五輪塔に隣接して、同じ年月と戒名をもつ安山岩製板碑形の墓碑がある。高さ83cm、幅37cm、奥行23cmを計り、「ア（梵字）　寛文９年巳酉　奉造立為道陽禅定門　明和二乙酉天十二月十八日　圓□浄□信士」と銘文が刻まれている。明和二年銘は、追刻である。なぜに約100年後の追刻銘文があるのか疑問であるが、道陽禅定門は、一石五輪塔と板碑形墓石の両方で供養されたことを物語る。江戸初期における石材使用の変革期をみるに重要な事象と捉えることができる一例である。

一石五輪塔は、畿内地方に多く関東地方ではまれな石塔である。このことから、ミヤボトケと同様に関西地方の人物の関与が想定される石塔である。

4　おわりに

以上、出島半島では銚子石で制作された石造物が４種９点確認できた。それらは、いずれも出島半島東端、しいて言えば霞ヶ浦沿岸地域に限られ認められた。加えて霞ヶ浦北岸の石岡市を含め、少なからず銚子石を使用した石造物が認められる事実は、霞ヶ浦を媒介

薬師堂の一石五輪塔

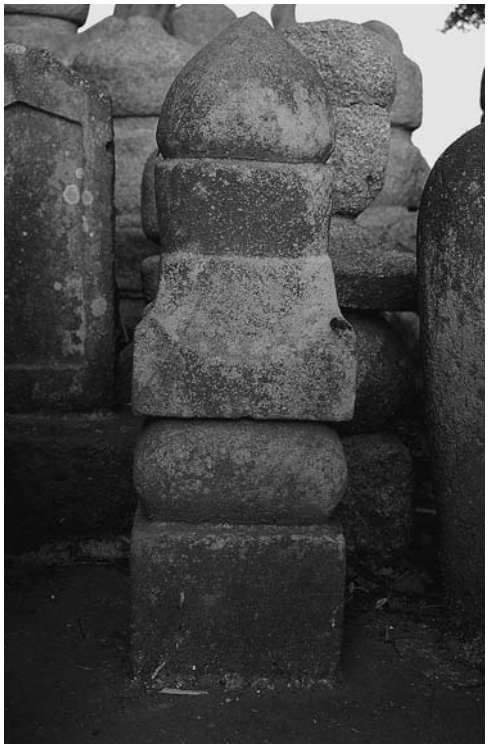


大久保家墓地の一石五輪塔

とした水運によってもたらされた物資、育まれた文化ということは言うに及ばないであろう。具体的には、香取の海に展開する諸津がその窓口となっていたのである。銚子域においては応安７年（1374）に成立したと推定される『海夫注文』に記載される「飯沼津」「野尻津」などが銚子石を船積みするための港として想定され（飛田2003）、ここから香取の海を北上したと考えられる。今回紹介した霞ヶ浦北岸地域の銚子石は、慶安３年（1650）に書かれた『霞ヶ浦四十八津掟書』にある「志戸崎津」「有河津」、「高浜津」などが荷揚げするための港として考えられる。周辺の銚子石流通圏をみても「津」周辺の事例が多くみられ、水運が媒介し広がりをみせる状況を裏付けている。

この銚子石を採用した人物層は、五輪塔や宝篋印塔においては、その銘文や造立される場所から僧侶や有力者に限定できる可能性をもち、加えるなら通常よりワンランク上の石塔といえる。稲敷市沼田の例などは、60人という多数作善の浄財によって可能となったものであろう。それに対しミヤボトケや一石五輪塔は、個人墓地や共同墓地に多く、有力者の伝承をもつものもあるが、庶民的な石塔と想定される。

そういった中でミヤボトケ・一石五輪塔は、関西系文化といえるものであり、関西地方と同様に砂岩という石材を故意的に使用し、制作されたものと考えられるものである。これらの石塔文化がピークを向かえる戦国時代は、前述したが霞ヶ浦沿岸地域には高野聖や熊野御師など西日本の宗教者が日常的に現れる状況で、彼らは戦乱により不安に陥る人々の逆修供養や死者に対する供養・法要を実施していた。高野山を通して弥勒信仰の



宮嶋家墓地の一石五輪塔

四十九院の思想、熊野信仰からの地蔵や観音信仰など盛んに説かれ、浸透していったことであろう。

さらに、戦国時代の銚子地方や香取の海沿岸には、「旅網」と称した季節的な出稼ぎ漁業が関西漁民によって展開され始めていた。元禄５年（1692）頃は、紀伊・和泉・摂津から銚子に来ていた漁船の数は68艘とされ、当時の飯沼村が所持していた漁船が12艘であったことを考えると、相当の関西漁民が来ていたことが想像される。また、銚子石産出地である愛宕山の南側に隣接する外川浦では、紀州有田郡広村の崎山次郎右衛門が万治元年（1658）に港を造り繁栄をもたらしたとされ、宝暦４年（1754）のデータであるが網方商人225人の内205人が紀州出身者であったという。このように、中世末から近世初期の時期に西日本の人々の動きが、当地方にはみられていたのであった。

ミヤボトケや一石五輪塔といった関西系の石塔は、こうした人々により移入され、銚子石で制作されたものではなかろうか。

本稿では、限られた資料を紹介する中に筆者の若干の考えを述べてみた。資料が少ない中に早計すぎた観も否めないが、銚子石石塔文化を考える上での一例と捉えていただければ幸いである。

石塔が物語る地域史は多様である。今後も資料化しながら様々な視点から情報を引き出し、その情報を通して当時の人々と会話をしてみたいと思う。その会話の中には、現代人に問いかける「日本文化」が数多くあったりする。現代人は、過去を振り返ることを忘れがちである。石塔は、筆者にとって過去を振り返ることの大切さを教えてくれる重要な遺産である。先人の声に今後も耳を傾けていくことを誓い擱筆する。

主要参考文献

圭室文雄　1987『日本仏教史　近世』吉川弘文館

三浦茂一編　1998『図説　千葉県の歴史』河出書房新社

黒澤彰哉　1996『石岡の石仏』石岡市教育委員会

飛田英世　1997「玉造町・西蓮寺の下総型石造物」『調査研究報告』第７号　千葉県立大利根博物館

飛田英世　1998「中世の石造物」『あそうの石仏石塔』麻生町史編さん委員会

桃崎祐輔　2002「遠江東部における中世石塔の変遷とその意義」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第10集　特集「中近世石造物と社会」帝京大学山梨文化財研究所

藤澤典彦　2003「石工の近世的展開－南都を中心に－」『中世諸職』シンポジウム「中世諸職」実行委員会

飛田英世　2003「郡域における石塔用石材の搬入とその背景」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会

千葉隆司　2005「中世常陸国の高野山信仰の一例－南野荘宍倉郷を中心に－」『筑波学院大学紀要』第１集　筑波学院大学

石造物研究会　2007『日引』第９号　特集「一石五輪塔の諸問題」